

ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』  
——“Désirée’s Baby”と“La Belle Zoraïde”——

宇 津 ま り 子  
(山形大学人文学部)

山形大学紀要（人文科学）第18巻第4号別刷  
平成29年（2017）2月

# ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』 ——“Désirée's Baby”と“La Belle Zoraïde”——

宇 津 まり子  
(人文学部)

## I. はじめに

19世紀アメリカの代表的女性作家としての地位も確立し、フェミニスト的主題の提起に定評のあるKate Chopin (1850-1904) だが、その評価に大きな傷を与えかねない可能性をはらむのが、彼女の黒人表象のあり方である。1969年に全集を編み、ショパン研究の端を開いたPer Seyerstedも、ショパンの黒人表象については、“That some of Kate Chopin's Negroes are stereotypes is hardly surprising . . . She obviously could not see the whole Negro” (79) と指摘している。ショパンは特にメイン・ジャンルである短編作品において黒人ステレオタイプを多用しており、彼女の人種観とそれが作品に及ぼす影響について、Helen Taylorは “Chopin's racism is a central element in her writing, and cannot be ignored or simply excused. As with [Grace] King and [Ruth McEnery] Stuart, her inability or refusal to confront it created critical problems and severely limited her achievement” (156) と強く批判している。

81年の論文でEmily Tothは、ショパンの頻用する黒人ステレオタイプをフェア・メイデンやダーク・レイディと同様の「文学慣習」の一つに数え、“which can be more correctly termed stereotypes” (“Convention” nos. 7) と注釈で片づけているが、80年代の有色フェミニストによる白人中産階級フェミニストへの批判を経た後には、そのような露骨に問題を軽視する態度は許容されるものではなくなっている。タイラーと同年に著作を発表したAnna Shannon Elfenbeinが<sup>3</sup>、“only in her treatments of women already stigmatized in the American racist's imagination is her treatment of sex unrestrained” (123) と指摘したように、ショパンのトレードマークとも言える性の探求すら、黒人を始めとする有色人種の女性に社会的に付せられたステレオタイプを利用する形で行われていることは認めざるを得ない。

黒人をステレオタイプ化して描いているという事実は変わらないが、本論ではこの問題に再び焦点を当てる。人種に関する議論は2000年頃を境に新しい方向に進展し、“The laws surrounding mixed race people—indeed, the ‘one drop’ rule itself—demonstrate that race is a construction, something that people make up, a figment of the collective imagination” (Johnson 4) など、アメリカの人種制度の根幹そのものの構築性が指摘されるようになっており、再検証

の余地があると思われるからである。本論では、20世紀初頭にワンドロップ・ルールが法制化されていく直前の時期に執筆に従事していたショパンの黒人表象を社会的、個人的文脈からもう一度見直した上で、*Vogue*という雑誌媒体を補助線として導入したい。『ヴォーグ』は、女性を巡る問題の描写法や主題設定に関する19世紀末の制約を相当程度緩和した媒体としてショパン研究では位置づけられ、他の19世紀の大手雑誌とは異なる編集方針がショパンの作家としての自由度を高めたと評価されている。最終的には、この雑誌に掲載された "Désirée's Baby" (1893) と "La Belle Zoraïde" (1894) を取り上げ、ショパンの一般的黒人表象と比較することで、『ヴォーグ』が拡大した表象の可能性は人種という主題にも及んでいることを示したい。

## II. ステレオタイプの社会的意義

Daniel S. Rankin、セイヤーステッドに続き、3人目の伝記作家にあたるトスは、ショパンの初期の黒人表象の多くは "Contented Slave or Happy Darkey convention" ("Convention" 202) を用いていると指摘し、パーティーにかまけて仕事に穴を開けそうになった白人青年のために黒人少年が瀕死の重傷を負う "For Marse Chouchoute" (1891)、痴呆症を患って徘徊する元奴隷の老人が自らを誇らしげにベニトゥス家の奴隷だと名乗る "The Bênitous' Slave" (1892)、南北戦争後もプランテーションに残り、毎日「これが最後の日だ」と言いながら生き続ける黒人老女を描く "Old Aunt Peggy" (1894) を具体例としてあげている。もう少し知られた作品を見ても、"Beyond the Bayou" (1893) の主人公ラ・フォルが南北戦争の負傷兵の悲惨な姿を見たトラウマを克服し、バイユーの対岸へ行くことができるようになるのは可愛がっていた白人の男の子の命を守るためであるし、"Tante Cat'rinette" (1894) の主人公もかつて仕えていた家で可愛がっていた娘が病気になったという知らせを受け、暗黒の森を駆け抜ける。同じテーマは "A Dresden Lady in Dixie" (1895) にも見られ、この作品では人形を盗んでしまったことが言い出せない白人の女の子の罪を黒人の老人が被っている。トスは「初期の黒人表象」と限定しているが、白人への献身というテーマは、*The Awakening* 出版の2年前にあたる1897年に発表された "Nég Créol" にも繰り返されており、主人公セザールはかつての主人の娘が75歳になって息を引き取るまで、毎日訪れて世話をしている。

トスは「満足した奴隷」と「幸せな黒人」の二つのみをあげているが、彼女が援用している Sterling A. Brown の1933年の類型には、"(1) The Contented Slave, (2) The Wretched Freeman, (3) The Comic Negro, (4) The Brute Negro, (5) The Tragic Mulatto, (6) The Local Color Negro, and (7) The Exotic Primitive" (180) の7種があげられている。例として上にあげた "Old Aunt

ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』  
——“Désirée's Baby” と “La Belle Zoraïde” ——

Peggy" の冒頭を見ておきたい。

When the war was over, old Aunt Peggy went to Monsieur, and said: -

"Massa, I ain't never gwine to quit yer. I'm gittin' ole an' feeble, an' my days is few in dis heah lan' o' sorrow an' sin. All I axes is a li'lle co'ner whar I kin set down an' wait peaceful fu de en'." (193)

ブラウン自身が "though overlappings *do* occur" (180) と断っている通り、「年を取って体も弱り、この世に残された日々はほとんどない」と言って南北戦争後も主人の元に留まろうとするベギーばあさんは「(1) 満足した奴隷」であるし、また自由というものに対処することのできない「(2) 惨めな解放黒人」でもある。そして、ほとんどなかったはずの残された日々はずっと続き、2年に一度は皆の顔の見納めに屋敷を訪れ、エプロンいっぱいの食べ物を持ち帰り、語りの現在においても自称125歳の彼女は揺り椅子に揺られ続けているという物語は、独特の表記法によって差異づけられた言語使用とも相まって、「(3) コミックな黒人」を演出している。さらに、ルイジアナの地方色作家として知られたショパンが地域文化、風俗の一面としてベギーばあさんを創出したのであるから、彼女は「(6) 地方色の黒人」でもある。

しかし、ブラウンが "This pattern of the joyous contentment of the slave in a paradisaical bondage persisted and was strongly reinforced in Reconstruction days" (183) と説明するように、このようなステレオタイプ使用はショパンに限られたものではない。18世紀末のEli Whitneyによる綿繰り機の発明によって、アメリカ南部の奴隷制度はその経済的利益を一気に増大させ、制度擁護の言説として黒人の劣性と従属的地位の相応しさを喧伝する、主人の下で幸福に暮らす奴隷がフィクションに頻繁に描かれるようになる。南北戦争後にもこの傾向が変わらなかったのは、親の世代の死や苦しみを覚えている子ども世代が失われた大義を嘆き、過去の美化を図ったというのが一つの理由だが、それに加えて、「再建」期という時代は結局人間の価値観を再建することはなく、奴隷制度を可能な限り復活させるための重要な原則として "Negroes were happy as slaves, and hopelessly unequipped for freedom" という言説の構築が必要とされていたからだとブラウンは説明している (183)。

フィクションの黒人たちが幸福であるのとは裏腹に、この時代の南部社会では人種に起因する殺害や闘争が続発していた。南北戦争を事実上終わらせることになったRobert E. Leeのアポマトックス・コートハウスでの降伏からおよそ8ヶ月の1865年12月にはKu Klux Klanが結成されているし、1877年の南部再建期終了後にはStewart E. TolnayとE. M. Beckが

"Lynching Era" と呼ぶ時代が始まる<sup>1</sup>。ショパンが多くの作品の舞台としたルイジアナにおいても、戦中に南軍で戦った5,000人を含むホワイト・リーグが1874年にニューオリンズで蜂起し、3日間に渡って州議事堂、兵器庫、市街を占拠したりバティプレイスの戦いが起こっている。再建期が終了して南部旧勢力が再び権力を握ると、南部諸州は黒人たちが獲得した権利を無効化する方向に動き、ルイジアナ州も1890年には列車の設備を人種ごとに分けて設置することを規定した法を制定している。この法への抵抗として意図的に計画されたHomer Plessyの裁判を経て、1896年に連邦最高裁が「分離すれども平等」の原則を打ち出した。

「楽園的隷属」が文学世界にあふれたのには、南部だけでなく北部にも要因がある。Marjorie Pryseは、南北戦争後のローカルカラー文学について以下のように説明している。

the editors of the *Atlantic Monthly* and other publications have identified "local color" literature as a kind of "regional realism" that might help bind the Union together again. "Local Color" could seem to reduce the fear of sectional and regional differences by making "colorful" characters humorous to readers outside the region. (132-33)

ショパン作品の人種構築を分析したBonnie James Shakerは、編集者たちがどのような人々であったかという視点からも検討を加えている。19世紀初頭には、出版者は未だ印刷と販売に長けた小売商人に過ぎず、家族や親族の縁故に欠ける彼らは概して技術職の商人階級に属していたという。しかし、識字率の飛躍的な向上、安価な娯楽としての読書習慣の広がり、そして輸送手段としての鉄道網の整備といった条件が整い、1820～50年の30年間で出版産業は10倍に成長する。書き手の獲得を巡って競争が加熱し、紳士協定を結ぶようになった彼らは、洗練されたビジネス慣習と礼節正しい言動を誇る「ジェントルマン・パブリッシャー」へと変容していく（18）。シェイカーが"an obviously white, upper-middle-class construct of heterosexual masculinity"（17）と特徴づける彼らは、読者としてWASPの中産階級を想定しており、雑誌に掲載される作品は娯楽や教養を提供するだけでなく"behavior manuals"としても流通していた（xiii）。ショパンを含む南部作家の作品は、具体的には"a social order that was hierarchized with the 'whitest' people at the top and the 'blackest' at the bottom"（xiii）を示すという役割を果たしていた。南部の地方色的一端として量産された幸福な黒人は、表層においては「リージョナル・リアリズム」としてその地域限定性が強調されつつ、根底では黒人種の生物学的、社会的劣性という概念を共有するアメリカの白人優越主義を支え、喧伝する装置として働いていたと言える。

1 TolnayとBeckは再建期後から大恐慌の始まりまでを「リンチの時代」とし、この期間に2,018件のリンチ事件があったとしている（17）。しかし地方紙やアーカイブ、裁判所の記録を検証し直したEqual Justice Initiativeの2015年の報告書*Lynching in America*では、その数は4,075件と倍増している。

### Ⅲ. ショパンのキャリア形成と雑誌

ケイト・ショパンはこのような状況の中、1889年に短編作家としてデビューした。最初の5作は南部には設定されておらず、発表された媒体も地方の小さな雑誌や新聞にとどまっている。転機が訪れたのは2年ほどを経た1891年のことである。この年、“A No-Account Creole” (1894) と “For Marse Chouchoute” (1891) でルイジアナのクレオールやアカディアン、黒人を題材にした途端、大手の*Century*誌と*Youth's Companion*誌で掲載を勝ち取った。圧倒的な購読者数を誇る雑誌媒体での発表は、特定の作家の作品を求めている訳ではない広い読者層へのアクセスを意味し、全国規模の雑誌での発表がこうして確保されたことで、ショパンは登竜門を一つくぐり抜けたと言える。それはまた同時に、題材を模索していたショパンを「南部地方色作家」として位置づけ、彼女のその後の方向性を決定づけることになった。

作家の命運が雑誌媒体での出版にかかっていたとすれば、作品が編集方針に大きく左右されることは想像がつく。前節で見たように、北部大手の雑誌編集者は南北分断の解消手段の一つとして地方色文学を捉え、白人優越主義の平和的描写を求めていたという時代背景は、それだけでも新進の作家が黒人の卑屈さを強調するステレオタイプを多用する理由になるだろうが、ショパンの場合にはそのような憶測を補強する帳簿が残されている<sup>2</sup>。執筆日、タイトル、ワード数、投稿した雑誌名とその日付、採用と不採用の別、その通知を受けた日付、作品に対して支払われた金額、そして出版された日付が綿密に記録されている。作品ごとのこのようなリストに加え、作品の買取価格に印税の金額を列挙して累計していくリスト、そして作品のワード数を列挙して累計していくリストも作成されており、日給やワード単価といった労働対価の計算も容易にできる構成になっている。

売り出しには作品だけでなく、作家本人のイメージも大きな要素となる。中流、上中流階級のWASPの価値観を体現する者として家族の価値を重視し、女性や若者読者を庇護する道徳の守護者だった(Shaker 17) ジェントルマン・パブリッシャーが采配をとる雑誌界において、女性作家がジェンター規範から逸脱しないことは重要な要素だった。19世紀の女性作家たちが執筆業という「男性的」仕事を意図的に軽んじ、あくまで家庭における役割が優先だと言明したことは、現在では社会的体裁を整えるための覆面として認識されているが、ショパンの場合にも、彼女の残したセルフ・プレゼンテーションのドキュメントと、伝記作家でもあるトスがルイジアナで掘り起こしたショパン像との間には大きなギャップが見られる。

セントルイス生まれのショパンが結婚後の15年ほどを過ごしたルイジアナをトスが訪れた

<sup>2</sup> 帳簿は*Kate Chopin's Private Papers*に収録されている。

時には、死後半世紀以上が経過していたにもかかわらず、ショパンの喫煙の習慣や人目を引くファッション、性的な魅力、不倫関係などが語り草になっており（*Chopin* 20）、不倫相手の娘が常々 "Kate Chopin destroyed [my] parents' marriage" と語っていたことも伝えられている（169）。他方、ショパン本人のセルフ・プレゼンテーションは、「いつ書くのか」という質問に答える形で書かれたエッセイに端的に表われている。

I shall say I write in the morning, when not too strongly drawn to struggle with the intricacies of a pattern, and in the afternoon, if the temptation to try a new furniture polish on an old table leg is not too powerful to be denied; sometimes at night, though as I grow older I am more and more inclined to believe that night was made for sleep. ("On Certain Brisk, Bright Days" 721-22)

ふざけた軽い調子ではあるが、執筆よりも家事が優先されることを明言している。晩年の作品*The Awakening*に関しては、敵対的なレビューへのディフェンスが存在するが、そこでも彼女は "I never dreamed of Mrs. Pontellier making such a mess of things and working out her own damnation as she did" ("*The Awakening*" 296) と、作者である自らの介在など存在しないかのような態度を示している。

「女性」作家としてだけでなく「南部」作家としてのイメージについても、意図的に構築していた形跡がある。シェイカーは、戦争に勝利した北部が南部の記述という作業を南部人に任せた理由の一つとして、オーセンティシティの問題をあげている。彼女によれば、遅くとも1839年のダゲレオタイプの発明以降、ジャーナリズムや芸術、表象分野において模倣の優劣が競われるようになり、それが地方色文学との関連では作家の当事者性の問題として表出するという。つまり、描写対象となる地域が遠ければ遠いほど人々と慣習は異なるものになるため、北部作家には南部の「リージョナル・リアリズム」を実現することはできないということである（23）。

1894年に最初の短編集を出版し、南部地方色作家としての地位が確立した後、友人の William Schuyler がショパンのプロフィールを *The Writer* 誌に寄せている。彼はセントルイスでショパンが毎週開いていたサロンの常連で長い友人だった。プロフィールの執筆にあたっては本人との打ち合わせも当然にあったはずである。

Her father's house was full of negro servants, and the soft Creole French and patois and the quaint darkey dialect were more familiar to the growing child than any other form of speech.

She also knew the faithful love of her negro "mammy," and saw the devotion of which the



ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』  
——“Désirée’s Baby” と “La Belle Zoraïde”——

well-treated slaves were capable during the hard times of the war. . . . (Schuyler)

実際のところ、セントルイスの町中で生まれ育ったショパンの家は、「黒人の召使でいっぱいだった」とは言えない。国勢調査の記録では1855年に4人、1860年に6人の奴隷しかいない (Toth, *Chopin* 24)。5年間で増えているように見えるが、1860年の6人のうち3人は9歳から6ヶ月の子どもでもある (Toth, *Unveiling* 22)。彼らが南北戦争中に見せたという「献身」についても、ショパンの母親が叔父に当てた手紙には "My negroes are leaving me[,] old Louise ran off a few days ago, I suppose the rest will follow soon" (Toth, *Chopin* 69) と記されており、事実とプレゼンテーションは大きく乖離している。

乳母を始めとする黒人と近接した生活は、南部作家の常套句になっているものだ。1927年にオー・ヘンリー賞を受賞したニューオリンズの作家Roark Bradfordの言葉にも同じ要素が繰り返されている —— "I believe I know them pretty well. I was born on a plantation that was worked by them; I was nursed by one as an infant and I played with one when I was growing up" (qtd. in Brown 179)。「彼らをよく知っていると思う」という言葉から明らかなように、特に乳母に象徴される黒人との近接は、彼らについて語るためのクレデンシャルを立ち上げる装置として働く。ブラッドフォードから時代は多少遡るものの、ショパンもまた南部作家としてのオーセンティシティを同じコードを用いて意図的に作り上げていたと言えるだろう。

社会的規範や出版界の要請を読み、ビジネスとして自らの「売り出し」というものを捉え、その枠の中でショパンは創作活動を行っていたと考えるのが妥当である。しかし、他人の欲望を巧みに読み取った「売り込み戦略」としてショパンの活動を捉えることは、人種問題に関する彼女の加害性を何ら軽減するものではない。確かにショパンの作品には、ホワイ・リーグに所属してリバティプレイスの戦いに参加した夫Oscarの過激な人種差別主義は見られない。しかし Joel Williamsonが "[t]he slide from a Conservative to a Radical posture in race, from a need to see the Negro as angel to a need to see the Negro as devil, was deeply grooved and well lubricated" (183) と表現したように、黒人を天使化するショパンの保守性と、悪魔化するオスカーの過激さの相違は紙一重であり、同じ白人優越主義に基づく。そのような国家的言説の構築、強化にショパンも加担していたことは明らかであり、本人に明確な意識があるか否かは無関係である。



#### IV. 『ヴォーグ』 作品における黒人表象—— “*Désirée's Baby*” と “*La Belle Zoraïde*”

ショパンが執筆に従事した時代背景と彼女の野心というものをこのように理解した上で、この節では『ヴォーグ』誌に掲載された黒人を表象する2作品、“*Désirée's Baby*” と “*La Belle Zoraïde*” を検討する。ショパンが最も多くの作品を寄せたのが『ヴォーグ』誌で、その数は19に上るが、作家の登竜門としての役割を果たしていた『ユース・コンパニオン』や『センチュリー』、『アトランティック・マンスリー』とは趣を異にする雑誌であったことは、1894年に発表された声明からもうかがうことができる—— “*The pink and white—debutante afternoon tea—atmosphere in which convention says we must present love, means intellectual asphyxiation for us*” (qtd. in Toth, *Chopin* 280)。Emily Esfahani Smithによれば、『ヴォーグ』誌は、ヴァンダービルト家、ホイットニー家、アスター家のようなニューヨークの上流階級を読者層に想定して1892年に創刊された。イギリスやフランスのように階級やそれに伴う作法や儀礼に欠けたアメリカ社会で、彼らがいかにその富を消費し、社会的模範となるかは大きな問題であり、ここに『ヴォーグ』が介入していったという。中産階級の女性の理想像を「我々にとっては知的窒息死を意味する」と明言したこの雑誌とショパンは、シェイカーの指摘する通り、白人の中上流階級の女性のための19世紀フェミニズムにおいて軌を一にしていたと言える（10）。

この雑誌に掲載された作品をいくつか紹介しておく。“*Doctor Chevalier's Lie*” (1893) では、貧民街の売春宿と思われる場所で若い娘が拳銃自殺する。呼び出された医者は、かつて地方へ出かけた際に偶然彼女の家族に世話になっており、両親がいかに娘を誇りにしていたかを回想し、私費で手厚く葬る。“*Her Letters*” (1895) では、病に冒され死に直面した主人公が、かつて不倫関係にあった恋人からの手紙をどうしても処分できず、残される夫に託す。妻の死の直後に包みを川に沈めた夫は次第に失われた手紙に取り憑かれ、後を追うように投身する。“*An Egyptian Cigarette*” (1900) では、主人公はカイロで入手したとされる煙草を友人に勧められ、それに火をつけた15分の間に、灼熱の砂漠で恋人に捨てられて死ぬという幻想を経験する。最も有名な作品はおそらく “*The Story of an Hour*” (1894) だろう。心臓病を患う妻に夫死亡の報せが入り、未亡人に約束された自由という想念に酔いしれていたところへ夫が帰宅し、妻は心臓発作で死亡してしまう。医者が死因を “*joy that kills*” (354) と特定する言葉で物語は終わるが、夫が生きていたことに対する喜びなのか、その直前に想像を膨らませていた自由な人生に対する喜びなのか、その答えは開かれたままである。売春婦、自殺、不倫、薬物に誘発される幻想、女の足かせとしての婚姻関係といった、当時のジェントルマン・パブリッシャーたちが締め出していたテーマが、『ヴォーグ』作品では実に率直に描かれ

ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』  
——“Désirée's Baby” と “La Belle Zoraïde”——

ている。『ヴォーグ』は1893年からショパン作品を掲載し続け、6年ほどしたところで問題作の*The Awakening*が出版される。大手雑誌にも作品を掲載し、時代の編集方針の趨勢に精通していたはずのショパンがここへ来て判断を誤った理由を、トスは “*Vogue, unwittingly, may have deceived her into thinking that *The Awakening* would be welcome*” (*Unveiling* 173) と分析している。

しかし、上に紹介した作品からもうかがえる通り、ショパンが『ヴォーグ』で展開した主題はフェミニズムに限られない。“Her Letters” には、恋人からの手紙を食べるなど、フェティシズムの要素も垣間見られる。また『ヴォーグ』作品以外でも近年、一見ヘテロセクシュアルな作品にレズビアニズムが織り込まれている可能性が “Lilacs,” “Fedora,” “Ma'ame Pélagic” などの作品で指摘されている<sup>3</sup>。19世紀アメリカで「ロマンティックな友情」と呼ばれた女同士の関係性は、1880年代以降、アメリカにセクソロジーが取り入れられていくにつれて「社会的な批判に曝されはじめ、異常、逸脱、変態、倒錯」とみなされるようになるが、現実世界における喪失とは裏腹に、文学の世界では特に地方色文学に取り入れられるようになると渡辺和子は分析している (97)。禁止、あるいは社会的な負の価値づけが、文学の主題としての価値を増すというのであれば、ショパンの『ヴォーグ』作品が扱う自殺、薬物、幻想、フェティシズムなどにも同じことが言えるだろう。とするなら、奴隷が解放され、彼らを社会に再編していく中でジム・クロウ法、ワンドロップ・ルールへと向かっていく情勢の中、人種の負の価値づけはいや増しになっていったと考えられないだろうか。

『ヴォーグ』に掲載された人種をテーマとする作品は “Désirée's Baby” と “La Belle Zoraïde” の2作のみである。“Désirée's Baby” は、出生の詳細が不明な妻との間に黒人の特徴を備えた子どもが生まれ、夫は妻を責めて死に追いやった後、白人として暮らしてきた自分自身に黒人の血が流れていたことを知るという悲劇である。“La Belle Zoraïde” もまた悲劇であり、女主人に大切にされたカフェオレ色のゾライドが、主人の意向に背いて黒檀色の肉体労働の奴隷との間に子どもを作り、恋の相手も子どもも女主人に奪われた末に発狂する。ブラウンの類型で言えば、これらは「(5) 悲劇のムラート」に当たるステレオタイプを用いた作品である。

ステレオタイプではあるものの、幸福な黒人とは対照的な意義を持つのが悲劇のムラートである。このステレオタイプはLydia Maria Childによる “The Quadroons” (1842) にその起源があり、奴隷制廃止論者によって盛んに用いられた歴史がある。廃止論者が悲劇性に焦点を当てるのは当然だが、主人公となるのは肌の色の黒い黒人ではなく、白人の血が混じるム

3 “Lilacs” についてはJaqueline Olson Padgett, Bonnie James Shaker, Nancy A. Walkerなど、“Fedora” についてはChristina G. Bucher, “Ma'ame Pelagic” についてはMariko Utsuがレズビアニズムの視点からそれぞれの作品を分析している。

ラートである。1926年に*The Negro Character in American Literature*を著したJohn Herbert Nelsonは、悲劇の題材として黒人は相応しくないという当時の見解を "the true African—essentially gay, happy-go-lucky, rarely ambitious or idealistic, the eternal child of the present moment, able to leave trouble behind—is unsuited for such portrayal" (136) と説明した上で、最終的には自身も "Only the mulattoes and others of mixed blood have, so far, furnished us with material for convincing tragedy" (137) と結論づけている。幸福な黒人のステレオタイプは、「本当のアフリカ人」と呼ばれる人々から苦しみや悲しみを感ずる能力を奪う働きをしてきたと言える。そして、ムラートなどの混血した人々が「説得力ある悲劇の素材」になったということは、ブラウンの言うように、少なくとも "a common humanity with the whites" (193) が認められていることを意味する。悲劇のムラートのステレオタイプも、登場人物の肌色を限りなく白人に近づけることで "a white man in chains was more pitiful to behold than the African similarly placed" (Nelson 83-84) といった意味合いを意図せず創出してしまうなど問題含みではあるが、ショパンが大手雑誌に掲載した短編作品では幸福な黒人のステレオタイプを多用していた事実には照らせば、『ヴォーグ』作品では悲劇が導入されていること自体がまずは大きな違いである。

悲劇であることに加え、"La Belle Zoraïde" では、ゾライドを狂気へと追い込んでいく出来事の一つ一つが彼女の女主人の言動に派生することが明白に表現されている。幼児の頃から自分の元に置き、世話をする黒人の奴隷までつけていた破格の待遇を裏づける女主人の愛情は、自分が決めていた結婚相手をゾライドが選ばないことが判明すると、執拗なパワーゲームに変わる。ゾライドの恋人を遠方のプランテーションに売らせ、生まれた子どもは死んだことにして取り上げ、密かにプランテーションに送る。度重なる打撃を受けたゾライドは、布切れで作った人形を自分の子だと信じ込み、ようやく対面が叶った本当の娘を認識することもできず、狂気のうちに生涯を送る。

実はこの作品は2重構造を取っており、時を経てゾライドの物語を語っているのは、Manna-Loulou という別の黒人女性である。幼い女主人に毎晩ベッドタイムストーリーを語って聞かせる献身的な彼女は、"herself as black as the night" (303) と描写されるほどに黒い肌をしている。マナ・ルルは、上に引用したネルソンが「本当のアフリカ人」とする「本質的に陽気で楽天的、野心や理念はほぼ持たず、問題を忘れ去りその時々を生きる永遠の子ども」であるはずなのだが、彼女にはゾライドの逸話を悲劇として認識し、そのように構成して語る感情と知性が与えられている。マナ・ルルと女主人の間に母娘あるいは祖母と孫娘の関係を漂わせて「満足した奴隷」のステレオタイプを用いつつ、その実、知性と感情を「アフリカ人」に取り戻させたのみならず、「満足した奴隷」であるはずの彼女に白人の責任を明白に問わせるという大きな転覆がこの作品には認められる。

他方、"Désirée's Baby" は明らかに人種問題を主題としながら、それが「誰の問題なのか」

ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』  
——“*Désirée's Baby*” と “*La Belle Zoraïde*” ——

という点を巧みに転覆させている。登場人物たちの会話で言及されるだけでなく、身体を伴って物語に登場する黒人は、乳母のZandrineと “one of La Blanche's little quadroon boys” (242) のみだが、ザンドリンが発するの “*Mais si, Madame*” (241) の一言のみ、少年にいたっては何も語らない。白人であるはずの主人夫婦から黒人と思われる赤ん坊が誕生したことで、プランテーションの黒人たちの間に “an air of mystery” (242) が漂うようにはなるものの、登場するザンドリンとクアドルーンの少年を見る限り、彼らは変わらない日々の仕事を淡々とこなしている。その姿と対照されるように、白人として暮らしてきたアーマンドとデジレの生活は大きくかき乱され、生活ひいては生命すら破綻させていく。

19世紀末のジム・クロウ法に続き、20世紀に入るとワンドロップ・ルールが導入されていく。「一滴」のアフリカ系の血によって人間を諸権利の享有主体から排除し、ジム・クロウの適用対象とするこの法は、白人と黒人の境界線を描き、被差別主体としての黒人を創出するものである。しかし、アメリカにおいては植民地時代から黒人と白人は共存し、混血は避けられるものではなかったし、またワンドロップ・ルール以前には法によって混血を許容してきた歴史もある。例えばヴァージニア州では、1705年には “the child, grandchild, or great grandchild of a Negro” まで、1785年には “one-fourth part or more of negro blood” までをムラートと規定し (Higginbotham & Kopytoff 15)、それぞれ 1/8、1/4 よりも黒人の血が少なくなれば法的に白人だった。1910年には基準は 1/16 となり、1924年の Racial Integrity Act で初めて「一滴」となる (Wadlington 53)。社会的混乱を引き起こすことが明らかなワンドロップ・ルールがあえて制定されていくことになる訳だが、Frank W. Sweet が興味深い理由づけを試みている。人種の定義の仕方次第で “all, most, or many White Americans” (loc. 7394) に当てはまってしまうような人種的条件を備えた白人の外見をした人々が法廷に立たされることが1900年頃から急増し、しかもそれ以前の「外見」という基準ではなく、“rumor, innuendo, and hearsay” が根拠とされるようになる (loc. 7381)。裁判の被害者とその家族を未来永劫、ジム・クロウの向こうの世界へ追放する「報復」や「罰」が可能になるのである。「黒人」に向けられたジム・クロウ法に続く形で制定されていくワンドロップ・ルールにはつまり、「白人」に向けられていたという側面が明らかに認められ、その目的は “to keep otherwise compassionate White American families in line” (loc. 7613) だとスウィートは結論づけている。

“*Désirée's Baby*” は、ワンドロップ・ルールの法制化へと向かっていく時代情勢の中で書かれた作品である。そのような社会では、緊張は人種間だけでなく、互いを監視し合う白人同士の間にも醸成されるだろう。物語は確かに、その結論に母親の人種を特定する結末を置くことでアーマンドを「白人一般」ではなく「見えない黒人」とし、人種の実体化に寄与してしまっている。しかし、出自が知れないがゆえに人種が不確定であり続けるデジレは、白人として生きてきたアーマンドに黒人性を構築されることによって死ぬのであり、赤ん坊が生

まれることによって噴出した事件は、"unexpected visits from far-off neighbors who could hardly account for their coming" (242) と描写されるように、他の白人たちによって監視されてもいるのである。この作品は、人種問題と呼ばれるものの帰属が既に黒人とされる人々のみならず、白人として生きてきた人々へとも広がっていく危機感、緊張感を表現し、「一滴」という厳密さを装いながら、実際には極めて恣意性の高い境界線に基づくアメリカの人種制度の危うさを突いていると言える。

## V. おわりに

ケイト・ショパンの多用する黒人ステレオタイプは、黒人の幸福さやコミックさ、依存心の高さを強調するものである。人種間の衝突もなく、平和で牧歌的なフィクションが構築されるが、これらのステレオタイプは、南北戦争後に南部を連邦に再編入させるという目的や、解放された黒人たちを社会にどのように編入していくのかという課題の中で、劣等人種として黒人を構築していくという国家的なアジェンダに組み込まれていたものである。このような情勢の中でデビューを果たし、女性作家、南部作家としてのイメージを作り上げ、戦略的に創作活動を行っていったショパンは、意識、無意識の問題は別としても、その一翼を自ら進んで担ったということになる。

しかし、19世紀末のヴィクトリア朝的価値観に囚われない編集方針を持ち、ショパンのキャリアを通じて作品を受領し続けた『ヴォーグ』誌に掲載された作品に目を転じると、様相は大きく変わる。II節で見た彼女の一般的黒人表象が、黒人から人間性や知性を奪うものであったのとは逆に、"La Belle Zoraïde" では語りの枠組みを巧みに用いることによって、それらを黒人女性の語り手に返還している。"Désirée's Baby" においては、その視点はさらに深まり、ワンドロップ・ルールの法制化前夜の社会情勢の中で、人種問題が白人の問題と化していく様、そしてそれが醸成する緊張感を映し出し、実体を持った所与としての人種という概念にすら疑義を挟む要素を持ちあわせている。

『ヴォーグ』はフェミニスト作家としてのショパンのキャリアを支えた雑誌として評価されてきたが、人種問題についても同様の深みを引き出す役割を果たしたと言えるだろう。ショパンの黒人ステレオタイプの多用という事実から考慮すれば、黒人を人間として平等に扱い、同等の社会構成員として受け入れようとする意味でのセンシティブさは彼女にはなかったと判断せざるを得ない。しかし、差別への加担や、その逆の平等への訴えだけが人種に関する興味が向かう先ではないことは、"Désirée's Baby" が如実に示している。『ヴォーグ』作品の主題の多様性から考えるならば、薬物や狂気、フェティシズムやレズビアニズムといった

ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』  
——“*Désirée's Baby*” と “*La Belle Zoraïde*” ——

規範から逸脱するセクシュアリティなど、時代が「禁忌」とする現象の一つとして、ショパンは人種にも関心を抱いていたと言えるのではないだろうか。



Works Cited

- Brown, Sterling A. "Negro Characters as Seen by White Authors." *The Journal of Negro Education* 2.2 (1933): 179-203.
- Bucher, Christina G. "Perversely Reading Kate Chopin's 'Fedora.'" *Mississippi Quarterly* 56 (2003): 373-88.
- Chopin, Kate. "The Awakening." *Kate Chopin's Private Papers* 296.
- . *The Complete Works of Kate Chopin*. Ed. Per Seyersted. 1969. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1993.
- . "Désirée's Baby." *Complete Works* 240-45.
- . *Kate Chopin's Private Papers*. Ed. Emily Toth and Per Seyersted. Bloomington: Indiana UP, 1998.
- . "La Belle Zoraïde." *Complete Works* 303-08.
- . "Old Aunt Peggy." *Complete Works* 193.
- . "On Certain, Brisk, Bright Days." *Complete Works* 721-23.
- . "The Story of an Hour." *Complete Works* 352-54.
- Elfenbein, Anna Shannon. *Women on the Color Line: Evolving Stereotypes and the Writings of George Washington Cable, Grace King and Kate Chopin*. Charlottesville: UP of Virginia, 1989.
- Higginbotham, A. Leon, Jr. and Barbara K. Kopytoff. "Racial Purity and Interracial Sex in the Law of Colonial and Antebellum Virginia." *Johnson* 13-27.
- Johnson, Kevin R, ed. *Mixed Race America and the Law: A Reader*. New York: New York UP, 2003.
- Lynching in America: Confronting the Legacy of Racial Terror*. Second Ed. Report Summary. Equal Justice Initiative, 2015.
- Nelson, John Herbert. *The Negro Character in American Literature*. 1926. New York: AMS P, 1970.
- Padgett, Jaqueline Olson. "Kate Chopin and the Literature of the Annunciation, with a Reading of 'Lilacs.'" *Louisiana Literature* 11 (1994): 97-107.
- Pryse, Marjorie. "Stowe and Regionalism." *The Cambridge Companion to Harriet Beecher Stowe*. Ed. Cindy Weinstein. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 131-53.
- Schuyler, William. "Kate Chopin." *The Writer* 7 (Aug. 1894): 115-17. Rpt. in *Delphi Complete Works of Kate Chopin*. Delphi Classics, 2003. Kindle.
- Seyersted, Per. *Kate Chopin: A Critical Biography*. 1969. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1980.
- Shaker, Bonnie James. *Coloring Locals: Racial Formation in Kate Chopin's Youth's Companion*



ケイト・ショパンの黒人表象と『ヴォーグ』  
——“Désirée's Baby” と “La Belle Zoraïde” ——

- Stories*. Iowa City: U of Iowa P, 2003.
- Smith, Emily Esfahani. "The Early Years of Vogue Magazine." *Acculturated—Pop Culture Matters*. *Acculturated—Pop Culture Matters*, n.d. Web. 26 Jun. 2016.
- Sweet, Frank W. *Legal History of the Color Line*. Palm Coast, FL: Backintyme, 2005. Kindle.
- Taylor, Helen. *Gender, Race, and Region in the Writings of Grace King, Ruth McEnery Stuart, and Kate Chopin*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1989.
- Tolnay, Stewart E. and E. M. Beck. *A Festival of Violence: An Analysis of Southern Lynchings, 1882-1930*. Urbana: U of Illinois P, 1995.
- Toth, Emily. *Kate Chopin: A Life of the Author of The Awakening*. New York: William Morrow, 1990.
- . *Unveiling Kate Chopin*. Jackson: UP of Mississippi, 1999.
- . "Kate Chopin and Literary Convention: 'Désirée's Baby.'" *Southern Studies* 20.2 (1981): 201-08.
- Utsu, Mariko. "A Subversive Subplot in Kate Chopin's 'Ma'ame Pélégie.'" *The Journal of the American Literature Society of Japan* 12 (2014): 21-33.
- Wadlington, Walter. "The *Loving Case*: Virginia's Anti-Miscegenation Statute in Historical Perspective." *Johnson* 53-55.
- Walker, Nancy A. "'Local Color' Literature and *A Night in Acadie*." Ed. Harold Bloom. *Kate Chopin*. Updated ed. New York: Bloom's Literary Criticism, 2007.
- Williamson, Joel. *A Rage for Order: Black-White Relations in the American South since Emancipation*. New York: Oxford UP, 1986.
- 渡辺和子『『ロマンティックな友情』の表象——ジュエットとフリーマンのクローゼットのなかの女同士の関係』、藤森かよ子編『クィア批評』世織書房、2004年、89-139。

# Kate Chopin's Representation of Blacks in and out of *Vogue*: A Reappraisal of "Désirée's Baby" and "La Belle Zoraïde"

UTSU Mariko

Kate Chopin, though critically established as a representative female writer of the nineteenth-century U.S., frequently stereotyped her black characters. The fact cannot be erased, but this paper tries to reexamine her use of stereotypes. In Chopin scholarship, *Vogue*, with its audacious editorial policy, has been recognized as a periodical that encouraged her radical exploration of women's lives. That the scope of its influence extended to racial issues is what this paper tries to show. The happy negro stereotype, rampant in the post-Reconstruction fiction, was instrumental in propagandizing the notion of racial inferiority in a society that was moving toward the legalization of Jim Crow practices and the one-drop rule. Chopin, through her fiction, contributed to the construction of such discourse, but "Désirée's Baby" and "La Belle Zoraïde," the two *Vogue* stories that deal with racial issues, demonstrate some elements that go against the era's current. A happy negro recognizes the pain of being black and testifies against the white cruelty in "Zoraïde." "Désirée" reveals race as a construct, and thus questions the basis of the one-drop rule.